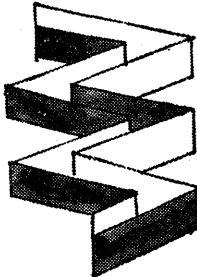

エリクソンと幼児教育 (8)



生 弥 科 仁

三、移動と性器期（その四）

次に興味あるのは、エリクソンが、この嘔む段階の激怒の中で乳児が経験する葛藤と、口唇期に享受した楽園の喪失とが悪の感覚の個性発生的起源であるかもしけないと考えているところである。彼はさらにその深刻な悪の意識を宗教が世界的規模で原罪の確信に変えたのであろうという。それゆえに人々は祈願や贖罪によつて貪欲すぎり世俗への欲望を絶たねばならず、また卑下した態度で、自分の肉体の貧弱さや才能や腕前の未熟さを今一度認め、自發的にわが身を苦しめるところまでへりくだらなければならないのである。それが、ダコタ族の生活の中で最高の意義をもつ宗教的儀式「太陽の踊り」に象徴されているといふ。それは、この踊りの志願者たちがもつとも苛酷な形式で自分の肉体を傷つけるという難行で、夏の祭りの最後の日に行なわれる。すなわち、彼らは太陽の柱に結びつけられた長い革紐の先の串を胸や背

中の筋肉に刺し通す。そして太陽をまっすぐに見つめ、踊りながらゆっくりと後ずさりし、ついに胸の肉を裂きちぎって、わが身を解き放すのである。こうして彼らはその年の精神的な勇者となり、またその苦しみによつて、太陽と野牛の靈（多産と豊饒の供給者）の恵みが引きつづき部族に与えられることを確実にすることができると信じていた。エリクソンは、この部族の独特的償いの形式は、幼児期の外傷（個体発生的でありながら、しかも文化全体に共通する楽園の喪失である）と、宗教的な償いの行事の特色との間に密接な関係があることを暗示していると分析する。すなわち、スー族の乳児は自由に母親の乳房を吸うことを見られてはいるが、噛む段階に入ると、それが許されず、それどころか、将来勇猛な狩人になるようにと母親の胸で故意に怒りを挑発される。その怒りが変遷を重ねてクライマックスに達したのがこの儀式であるというのである。つまり、この実直な人々は、子どもの頃にかりたてられた母親の乳房を傷つけたいというサディスト的願望を、今ここで己れに向ける。

己れの胸を特に難行の焦点に選んでいるのである。挫折した願望や特に幼い頃の漠然とした願望が罪の意識を生むことについては先に述べたが、その罪悪感の残滓はこのようにいつまでも残ることがあり、しかも実際に行なわれ、そして記憶されている行為にまつわる罪の意識よりもはるかに深く強く残るのである。それに対処するため、文化は、そこに教いがあるという事実を観衆を前にして少数の人たちに劇的に表現させるような宗教的慣習や儀式という制度を用意し、実はそれが人々の心の平安を維持するのに大きく役立つていて、エリクソンは宗教的慣習や儀式のもつ意味を分析している。

しかし、エリクソンは、子どものしつけを論じるにあたって、いわばそのねじをいくつか回して種族の特質や国民性のあれこれを作り上げるかのように、乳幼児期の扱い方がその集団の大人にみられる特性を生じさせるといつているのではない。彼が問題にしているのは、児童訓練という制度によって母親たちの手にゆだねられた目的や価値観や、それに費やされる莫大なエネルギーにつ

いてである。彼によると、その種の価値観は集団独特的の文化的エーネスがそれらを「当然である」と考えつづけ、それらに代わるもの認めないために存続する。またそのような価値観は個人の同一性の意識（これは個人が精神の健康と能率とを維持するために自己の核心として保持しなければならないもの）の本質的な部分となつているからこそ存続する。しかしそれらの価値観は經濟的に心理的に役に立たなければ存続しない。そしてこの目的のためには、それらの価値観が世代から世代へと引き続いて早期の児童訓練の中にしっかりと定着しつづけていなければならず、また同時に児童訓練も、一貫性を維持するためには経済と文化の統合された体系の中に深く組みこまれていなくてはならないと、彼は主張する。スー族の社会では、かつて地理的、経済的、および身体生理的な諸様式が強力に統合されており、それら諸様式は相互に拡充しあい、また文化の生活構想を経済的かつ効果的なものにしていた。そしてそのような統合が、このインディアンの社会に安定感を与えていたのであった。

しかし、白人の政策によって野牛を追う遊牧民としての生活様式を奪われ、彼らの現実についての概念や行動の理想や価値観が疑問視され、部分的な交換を余儀なくされた彼らには、今日、安定した社会としての存在はすぐれない。成熟した人間生活の完全な形態を備え、羨望する感じさせるような等質性と簡素な統合性が具体化されていた彼らの社会はないのである。そして彼らの生活の諸様式は白人の制度の中に移植されると、彼らを白人社会の最下層に並ばせる結果となつただけであった。

連邦政府は莫大な費用を投じてインディアン教育に当ったが、それは現実には異文化の接触の問題であった。すなわち、一方の自由企業制度における中産階級の価値観を代表する一団の政府役人たちと、他方の、部族の価値観の遺物となつた人々との接触の問題であった。そして政府の寄宿学校で教育をうけたスー族の子どもは、そこで教えられた価値観の多くを静かに受入れ、そして静かに捨てていた。特にしつけに関するかぎり、この部族の人々の間では昔ながらの原則が今日でも実行されてい

た。それについて、エリクソンは、子どものしつけといふものは、たとえ新しいしつけの体系がもちこまれておても、それが人々を納得させ、不可避なものであると証明されるまでは、古い体系がいつまでもその文化的統合のための道具でありつづけるからであるという。また、彼は、しつけを支えるスー族の発達観が白人の発達観とは明らかに区別できるものであるとし、そのことがスー族に白人的良心の確立を阻む原因ともなつていて分析している。たとえば、スー族の親たちは、子どもは幼い間は個人主義者であることを許されると考えている。親たちは子どもの身体的の要求に対してもきわめて寛容であり、子どものわがままを悪いことだとは考えていない。子どもが自己と自分の肉体との間に、また自己と親との間に相互の意志の伝達のし方を発達させつある間は、親は子どもの行動についてとやかく非難するようなことはしない。悪い習慣も子どもがやがて自ら恥じて自然にやめるだらうと大目に見過ごす。しかし、身体が発達し、子どもがそれを統御する自分の能力に確信がも

てるようになると、はじめて子どもは、しかるべきことをしなかつたとか、前代未聞のことをしでかしたなどの世間の噂話や陰口で容赦なく恥をかかされるのである。これが伝統であり、子どもはこれに従うこととを要求される。その結果、子どもは他人に承認されるひとかどの人間にすることに自律の誇りを感じるが、半面、自分がさらし者にされ、孤立させられることを死ぬほど恐れるようになる。したがって、白人の良心は自動的に、そして無意識的に、またそばに批判的な観察者がいなくても、誘導に対して負けない良心であるが、インディアンの良心は、明確に定義された名譽と恥辱との制度の中で当惑するような事態を避ける必要性に固執するだけであつて、「内なる声」によつてのみ解決が可能な葛藤場面においては、その良心は行動の方向づけをもつてない。そこで彼らは、困惑するとすぐその事態から逃避してしまうのである。エリクソンは、ここに、第二発達段階で問題にした自律感覚の獲得の失敗にもとづく恥の感覚とは明らかに区別できる他律的恥の心理を行動の規制原理

として見てとっているのである。

スー族とは対照的に、西欧文明の中産階級の親たちは、身体の機能や衝動を幼児期のできるだけ早い時期に

的力で人間を支配し、個人の際限のない不満と不適応という底流を作りだしている現実を、エリクソンは指摘している。

計画的に統制することが、子どもが後日社会に出てから能率的に機能することをもつとも確実に保証する手段であると確信していた。したがって、乳幼児に対し、メトロノームのように規則正しく日課を果すことを教えこむ。そして、そのような機械的社会化の後に、はじめて子どもを個人主義者になるように励ますのである。しかし、これとても問題がないわけではない。現代の神経症患者の中に、過度に機械的に秩序を守り、時間に厳守するなどの傾向を示す強迫神経症の患者が含まれていることはよく知られている。また、母親たちが子どもを標準化し、調整しすぎた結果、強迫観念にとらわれているかのように標準化された職業的分野の範囲内にとどまろうとする若者もいる。そして技術革新とともに専門化が進んで、西洋文明はますます機械に精通するようになつたが、それは同時に、機械と機構という非人間的な独裁

とところで、エリクソンの現地調査の五年後に、マクグレゴーと彼の研究グループが一年間にわたってインディアンの児童二〇〇名を対象にして大規模な調査を行なっている。その研究は次のような結果を報告している。すなわち、ダコタ族の子どもは、五歳か六歳になる頃まで、家庭で安定感と愛情が培われている。寄宿学校は家庭に比べると、物質的にぜいたくができる場所であり、さまざまな興味を満たす豊かな機会を与えてくれる場所であるため、子どもたちはもつとも愉快な数年間を過ごすことができる。それにもかかわらず、高校に進学した生徒の大半は卒業していない。彼らは、おそらく早かれ学校をぐる休みするようになり、ついには永久に去ってしまう。原因は、恥や競争の問題、男女交際の問題などを、社会的慣習や価値観の変化のために解決できなくなつた事態にすっかり困惑したためである。たとえ

ば、徒競走のチームの子どもが、いざスタートとなると、二の足を踏むことがある。そして「なぜ走らなければならぬのか」「誰が勝つかすにはつきりしているではないか」などと訴えるという。彼らの心の底には、この競走で勝つても、後であまりよい目はみないことがわかつていて、つまりその子どもの運命は「父親が銀行に預金をもつてゐる子ども」と同じ道を辿るからである。なかには教師の要請を受入れ、学校生活ですぐれて、平均的水準にまで引下げられてしまうという。その他、たとえ長い期間教育を受けたとしても、それが、より一層明確に定義された同一性——或はより一層確実な収入や職業——を約束するとは考えられないことも高校を中心してしまった原因と考えられている。

彼らは成人すると、特別保留地に留まるか、外へ出ても、また帰つてくる傾向がみられる。彼らが受けた幼児期の寛容なしつけのために、家庭がもつとも大きな安心

感を与える場所となつてゐるようである。とはいへ、学校で過ごした数年間の経験が、家庭と若者の双方を互いに受入れがたい存在にしてきたことも事実である。たとえば貧乏は避けることができるということを学んだ若者たちは、父親がなまけていて、政府に依存する傾向が抜けないことを嘆く。また、彼らが白人の慣習の中からわずかながら同化したものを見そかに周囲の噂話で中傷されると、その圧力を破壊的であると考えるようにもなつてゐる。しかも、学校で学んだことを部族の再興のために役立たせる努力をする前に、軍隊や出稼ぎ労働や産業労働などに勧誘され、それらに参加する若者も増えた。そしてこの傾向は、農村部の最下層の白人や都市の黒人人口が抱える諸問題に、インディアンたちをも仲間入りさせることになつた。なかには教師を目指して大学に進学し、或は公務員職に就くための準備をする若者もいるが、彼らはダコタ族以外の保留地に職を求める傾向がある。それは、彼らを高い教育を受けた者として認めはするが、彼らより人生経験の豊かな部落の長老が話を

するときには、彼らは沈黙を要求されるという二重の道德規準から逃れるためである。その結果、将来、指導者になる可能性のある有能な若者たちがその共同社会から失われてしまうのである。

ダコタ族の生活における最大の変化は、家庭の果たす役割の変化であるという。家庭はもはや人々に自信を与える、それを強化するところではなくなり、孤立し、無能感に打ちひしがれた人々の避難所となってしまってい

る。特に、子どもとその父親との間柄の変化は注目に値すると思われる。すなわち、父親は子どもに何も教えることができず、事実、子どもにとって、父親は見習うべき手本ではなくて、避けるべき手本になっている。その代わりに、男の子は同年齢の仲間から承認や賞賛を得ようとする。しかしそれは非行に結びつきやすい。結局のところ、教育を受けることや就職することは、ダコタ族の子どもの新しい野心であるが、彼らにとって確かな新しい職業的モデルはまだ具体化していないのである。或是特定の役割や機能のどれ一つにも自分を明確に所属さ

せることができない。エリクソンの言葉でいえば、同一性を見いだすことができないのである。そのため彼女の野心もまもなく枯れてしまうのである。そして全般的な無感動が支配的となる。その結果、たとえ向上の機会が提供されても、彼らの無感動が自発性と勤勉の発動を妨げることになり、さらに慢性的な飢えと貧困の状態が続くことになるのである。

マクグレゴーらが行なった統覚検査の結果に反映されているダコタ族の子どもの世界像は大変興味深い。それによると、彼らはこの世を危険や悪意に満ちた世界として描いている。乳幼児期の家庭生活における情愛こまやかな人間関係は、郷愁の念をもつて記憶されている。その他で明らかにされたことは、彼らにとって世の中には確実なものや目的などは殆どないようである。彼らの物語に登場する人物には名前がつけられていない。明快な活動もなければ、確たる結果もない。そして警戒心と否定主義が全員の発言の大きな特徴である。彼らの罪悪感や怒りは、些細な非難や目的のない拒絶、或はただ仕返

しのための衝動的な盜みとして物語の中で表現されてい

る。

その研究は次のように総括している。すなわち、被験者の最年少グループ（六一八歳）の子どもは、将来はともかく現在は、年長者にみられるよりもよく統一された人格の発達の可能性を示している。九歳から十二歳のグループは、活力の横溢と快活さにおいて白人の子どもよりも劣つてはいるが、被験者群の中で比較すると、もつとも自由で、自分自身に対して一番寬いでいるように見える。そして思春期の到来と共に、子どもたちはだんだん自分の殻の中に閉じこもりはじめ、周囲の世界に興味を失うようになる。彼らは諦め、無感動になり、受身的になる。青年期において盜みは三倍に増え、また社会の悪意を恐れる心は白人やインディアンの長老者たちと、その制度や慣習にも向けられるという。

以上のような結論について、エリクソンは次のように分析している。すなわち、ダコタ族の幼児期には、貧困と全般的不活発という限界はあるものの、他の時期に比

べて比較的豊かで自發的な生活があり、それが学童に比較的統合された人格——大きな信頼とわずかな自律といくらかの自發性とをそなえた——をもつて家庭から巣立つていくことを可能にしている。九歳から十二歳の間にみられる自發性は、遊びや仕事に向けられるが、まだ素朴で、あまり上首尾には發揮されない。ところがいかに自發性が損われずに保たれていても、同一性を見いだすことはできないという現実が、思春期になつてまぎれようもない事実として子どもたちの目に明らかとなる。子どもが情緒的に引込み思案となり、何ごとにも参加しなくなるというのは、その結果としての現象なのである。また、かつては、男の子の場合、かりたてられ、抑圧された乳児期の嗜みたい願望や怒りは、成人の曉には狩人精神や闘争精神として容易に發揮され、役立つものとして意味があった。野牛を追っていた時代には、幼い時に引き起こされた狩猟や戦いの情緒的イメージを集中させることができた野牛という動物が身近かにいた。今ではそのように自ら選ぶことのできる目標は何も存在しないの

である。女子は革を噛んでなめしたり、刺繡に必要なやまあらしの針を噛んで平たくしたりして歯を酷使した。こうして実益のある仕事に噛みたい願望をうまく振向けることができたのであった。しかし今日の彼らにはそのような自発性の目標はなく、今でも初期のしつけで引き起こされる幼児の怒りについては、それをその後の訓練で利用したり、或は他に転換させることなどはなされていない。その結果が無感動であり、沈うつである。そして子どもの心の中の秘められた怒りが転換の代わりに投射されて、周りの大人の世界を敵意に満ちているとみると見方に強力に增幅されているのである。そればかりではない。人々は自己の未使用の攻撃性を恐れるようになる。その恐れは、実際には存在しない危険を想像したり、空想の中で危険を誇張するという行為になつてあらわれるるのである。現実においては、衝動的に報復的に盗むという若者の行為が、かつては周到に準備された力として狩獵や戦いに向けられた獰猛さを表現する唯一の行為となつていると解釈されている。したがって、子ども

の発達を妨げるのは、しつけの制度それ自体や、その抑圧的な力ではないのである。それは児童訓練の統合的メカニズムが、社会の価値観の急激な変化に直面して、意義のある社会的役割の新しい制度を支えるという機能を果たしえないでいるという事実にあると、エリクソンは力説している。

もしこの種の分析を現代のわれわれに適用するとすれば、はたしてどのように言えるであろうか。科学技術の加速度的な進歩や、生産力の向上はわれわれの価値観や生き方をどんどん変えていく。多くの人々は一定の価値観を確立しがたい状況にある。しかも、たとえば価値観の多様化とはげしい競争社会と、一方では徹底した管理社会体制と価値観の画一化というように互いに相反する世界が共存して事態を一層錯綜させている。このような現代社会を分析した小此木は、たとえば、高学歴社会における大学入学までの過酷な進学競争と大学時代の平和なモラトリアム（猶予期間）という相反する二つの心理構造における二つの自我の統合の破綻の例証として、ス

チューイング・アペルをあげている。それは大学入学後しばらくしてあらわれる無気力や無欲の減退の慢性症状である。彼らは中学高校時代のはげしい受験戦争に明け暮れていた競争社会から、突然すべてを一時的に棚上げすることが許され、また大人としての社会とのかわりが猶予される居心地のよいモラトリアム状態に移り住むや、現実感覚を失い、学生生活に参加する積極的意欲をも失つてしまつた結果であると考えられている。

してみると、エリクソンは、このような危機に直面して展開される個々の人間の内面の葛藤に光をあてたのである。そして、人間が社会的存在としての生存を全うするためには、児童訓練が子どもに植えつける道徳意識は子どもが生まれた歴史的時代の変動に適合できるだけの堅固さと柔軟性とをもつていなければならず、また、しなやかで強い自我の統合能力が必要であるという考え方を打ち出した彼は、そのような危機に対処する一つの方策を提示したといえよう。エリクソンはその自我の心理社会的統合能力を「同一性」と呼び、「同一性」という語

は、自分自身の中の持続的な自己同一性、および他者とある種の本質的な特性を持続的に共有しているということとを結びつけているという意味で、相互的な関係をあらわしている」と述べている。すなわち、同一性的形成過程は、自我の機能による自己の統合にくわえて、これまでかかわってきた役割や期待とこれからかかると予測される役割や期待という個々人の属する集団の価値志向もある程度反映しなければならない。つまり個人の同一性は社会的期待と個人的選択の統合により形成されると考えられている。まさに、エリクソンは、未開部族の觀察や考察からえた深い洞察によつて、自我の統合作用と社会機構との相互補完作用を強調する同一性的概念に到達したのであった。この同一性の概念については次回でも少しくわしくふれてみたい。

(津田塾大学)